

令和3年2月3日

京口門だより No.88

今年は例年になく寒い冬と、うち続くコロナ感染症で、心身ともに疲れや違和感を感じながら過ごしてきました。しかし暦ではこの3日は立春となります。

「音なしに春こそ来たれ梅一つ」(召波)

今年も1月末から早や花粉症の到来です。昨年は花粉が少なかったから今年が多いのではないかとされています。激しい鼻水、くしゃみ、鼻閉、目の痒みなどの症状を現わし、ひどい場合には仕事も手につかない、夜も眠れないこともあります。

花粉症は春や秋の季節の変わり目に起き、ほかの時期にはあまり症状は出ません。一方、季節にかかわらず症状が起こるものは、通年性のアレルギー性鼻炎(鼻アレルギー)といわれています。

起こる時期の違いはあれ、起っている現象は鼻や眼の粘膜のアレルギー性炎症です。花粉症ではスギ、ヒノキ、ブタクサ、イネ科植物などの抗原が、通年性の鼻アレルギーではハウスダストと呼ばれる生活空間内のホコリなどが抗原となり、鼻や眼あるいは気管支の粘膜でアレルギーの反応が起こり、粘膜にある肥満細胞(マスト細胞)からヒスタミンなどの化学物質を分泌し、それが鼻水、くしゃみ、鼻閉、眼の炎症などを引き起こしてきます。

現代医学ではアレルギー反応の引き金になるヒスタミンなどの作用を止める薬物を使うことが主流です。こうしたアレルギー反応をひっくるめて抑えるのが、粘膜へのステロイド噴霧です。このような治療で花粉症や鼻アレルギーがすっかり抑え込まれるなら良いのですが、実際はなかなかそうはいきません。

では漢方薬はどうかということですが、ヒスタミンによるアレルギー反応を直接抑えるのではなく、花粉症の症状や体の特質(証)によって薬を使い分けます。鼻水、くしゃみ、目の痒みなどの鼻漏型は、その背景に水毒と冷えがあると診断して、麻黄剤に附子という温める働きのある薬を加えて用います。また鼻閉の強いタイプには柴胡剤と麻黄剤を合わせて、鼻などの部位の血行を改善し、炎症を治す薬を使います。漢方薬だから効くのに時間がかかるだろうと思われる方がいますが、案外即効性があり、抗ヒスタミン剤のように眠気をきたすこともありません。鼻閉型に用いる薬は副鼻腔炎にも有効で、慢性化した鼻アレルギーの場合に用いられます。

花粉症、鼻アレルギーともに漢方治療を試みてください。

